

情報技術による地域課題の解決を題材とした 社会人基礎力を涵養する授業の実践

Educational practice on solution of local problems using ICT for cultivating basic abilities to work in society

勝瀬 郁代

Ikuyo Masuda-Katsuse

近畿大学 産業理工学部

Email: katsuse@fuk.kindai.ac.jp

あらまし：地域社会の課題を ICT で解決する事業を提案する活動を通じて社会人基礎力と主体的な学びを養う教養教育プログラムを提案する。プログラムの前半では ICT を活用した地域活性化のためのプロジェクトをペアで研究した。後半ではグループごとに地域の課題を抽出し ICT を活用して解決する事業を提案した。学生の振り返りアンケートの結果、授業到達目標の達成度と社会人基礎力の向上の主観的評価の両方において概ね高評価を得た。

キーワード：教養教育，ICT 利活用，地域課題，社会人基礎力，アクティブラーニング

1. はじめに

近畿大学産業理工学部では、教養教育科目として、情報リテラシーと Microsoft Office のスキルを学ぶ情報処理 I・II、IT パスポート試験の範囲を中心に一般情報教育を実践する情報処理 III に加えて、2016 年度に「地域社会と情報」が新規に開講された。本論文では、この教養教育科目「地域社会と情報」の教育プログラムとして、自ら地域社会の課題を見出し、その課題の解決のために ICT を利活用できる能力を涵養するとともに、学習活動を通じて社会人基礎力を涵養するプログラムを開発し、実践した結果を報告する。

2. 授業の到達目標と授業計画

授業の到達目標は次の 4 項目を設定した。

目標(1)：地域社会が抱える問題を認識でき、その問題の本質を正しく理解できる。

目標(2)：問題解決のための、人的・組織的ネットワークの必要性に気づくことができる。

目標(3)：地域課題の解決に利活用できる情報技術・情報システムの基礎知識がある。

目標(4)：共通した問題解決へ向けて、協働して取り組むことができる。

授業計画は、二段階で構成される。第一段階では、各自治体が地域活性化のために ICT を利活用して実践した実践事例⁽¹⁾を学び、第二段階で、自ら地域社会の課題を見出し、ICT により解決する事業を提案する。全 15 週の授業計画を表 1 に示す。

本科目の成績評価基準は、予習課題 20%、第一段階の事例研究協働活動報告書 20%、第二段階の事業提案書 40%とプレゼンテーション 20%である。授業到達目標の達成度はこれらの評価に複合的に反映される。さらに、毎授業の終わりに受講生が「振り返りシート」に記入することで、自らの達成度を意識

できるようにした。各週の振り返りシートの質問項目は、授業への取り組み姿勢の自己評価と、授業到達目標に関わる自己評価からなる。授業最終回には、授業全体の振り返りを行う「最終振り返りシート」に回答してもらった。このシートでは、到達目標の達成度、授業への取り組み姿勢、社会人基礎力の変化などについて、主観的に評価してもらった。

表 1 授業計画

授業週	テーマ	具体的内容	形態
1	導入講義	到達目標とその意図、授業の進め方と成績評価方法の説明	座学
2～6 (前半)	事例研究 協働活動	総務省 ICT 地域活性化ポータル の実践報告を教材として、ICT を利活用して地域社会の課題 を解決する事例を学ぶ	ペア ワーク
7	事例紹介	地域の問題解決事例や利活用 しやすい情報技術の紹介	座学
8～15 (後半)	事例提案 協働活動	自ら地域社会の課題を見出し、 ICT により解決する事業を提案 し、プレゼンテーションする	グループ ワーク

3. 振り返りシートによるプログラムの検証

3.1 授業到達目標達成度

各週の授業で実施した振り返りシートにおける達成度の評定から、達成度評価の推移を観察した(図 1)。評定は、1:全く達成していない、2:あまり達成していない、3:やや達成した、4:十分に達成した、の 4 段階である。グラフより、実は授業開始時の達成度の評定が高いことがわかる。つまり受講生は当初、「自分は最初からできる」と自己評価していたといえる。そして、協働活動が始まった 2 週目に評定値が大きく下がる様子が興味深い。自分の能力を客観的に知る機会があり、思っていたほど自分はできていなかったという“気づき”があったことが見て

取れる。同様に、目標(1)については、解決すべき課題の検討を始める後半1週目に、目標(2)については、問題解決手段の検討を始める後半3週目に、目標(4)については、グループワークを始めた後半1週目にも大きく低下し、いずれもその後、次第に上昇していることがわかる。

後半協働活動における評定値の増加傾向を、ノンキー検定を用いて統計的に検定した結果、目標(1)は $p=0.0008492^{**}$ 、目標(2)は $p=0.09491$ 、目標(3)は $p=0.01478^{*}$ 、目標(4)は $p=0.006427^{**}$ となり、目標(1)(3)(4)については、授業回を重ねるについて有意に向上していることがわかった。

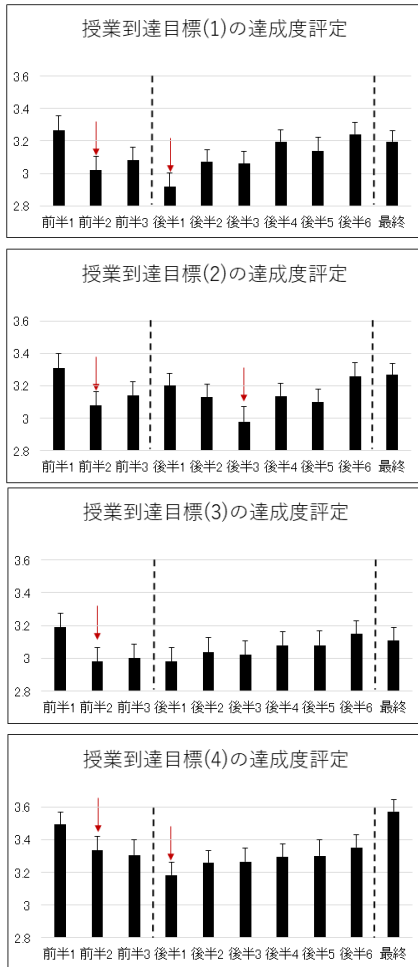


図1 授業到達目標達成度評価の推移

3.2 社会人基礎力向上に関する評定

図2は、この授業を受講したことでどれくらい社会人基礎力が変化したかを自己評価した結果である。評定1は「大きく後退した」、評定2は「少し後退した」、評定3は「変わらない」、評定4は「少し成長した」、評定5は「大きく成長した」である。評定値を間隔尺度とみなして評定値の平均を計算した結果もグラフ中に示す。すべての基礎力において、大小に関わらず「後退した」と回答した受講生は皆無であり、大半の受講生は、少しもしくは大きく成長したと感じていることがわかる。

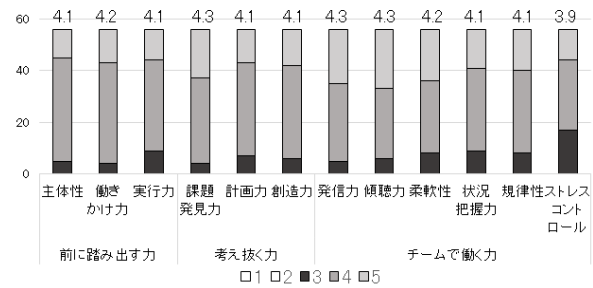


図2 社会人基礎力変化の主観評価

3.3 授業到達目標達成度と社会人基礎力向上の関係

図3は、社会人基礎力の変化の評定と各授業到達目標の達成度の評定からグッドマン・クラスカルの順序連関係数を求め、プロットしたものである。社会人基礎力のうち、働きかけ力と計画力以外は、いずれかの到達目標と、比較的強いもしくは強い相関があることがわかる。

目標(1)の達成度は、課題発見力、創造力、状況把握力、規律性とやや強い相関があり、目標(2)の達成度は、実行力、状況把握力、規律性とやや強い相関があり、目標(3)の達成度は、実行力、傾聴力、柔軟性とやや強い相関があることがわかる。目標(4)の達成度は、実行力、発信力、状況把握力、規律性の向上と強い相関が、主体性、傾聴力、柔軟性、ストレスコントロールの向上とやや強い相関があることがわかる。

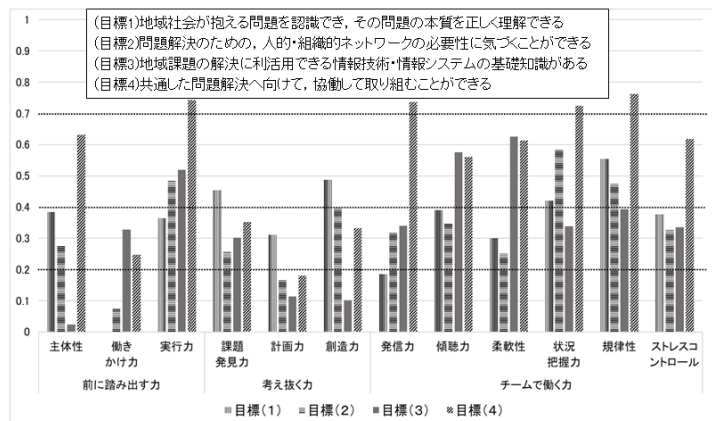


図3 目標達成度と社会人基礎力向上の関係

4. まとめ

自ら地域社会の課題を見出し、ICTにより解決する事業を提案する活動を通じて、主体的な学びと社会人基礎力を涵養するプログラムを開発し、教養教育科目「地域社会と情報」で実践した。最終振り返りアンケートの結果、授業到達目標の主観的達成度、社会人基礎力の向上の主観評価とも、おおむね高い評価を得ることができた。

参考文献

- (1) 総務省：“地域活性化ポータル”，
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/top/local_support/ict/index.html (参照 2020.4.10)